

英語で自分の考えや気持ちを伝え合う児童生徒を育てる授業づくり

— 小・中・高等学校の系統性を踏まえた「話すこと [やり取り]」の指導の充実を通して —

〈外国語教育研究グループ〉

飯田 明日香¹, 原田 都加², 佐藤 拓也³, 尾形 和正⁴, 近江 克哉⁵,
齋藤 弘美⁶, 渡邊 隆仁⁶蔵王町立宮小学校¹, 柴田町立船岡小学校², 塩竈市立第二中学校³, 大崎市立鹿島台中学校⁴, 宮城県松島高等学校⁵,
宮城県総合教育センター⁶

【要約】 本研究では、英語で自分の考えや気持ちを伝え合う児童生徒を育てる授業づくりを行うために、「対話表現集の活用」と「発問の工夫」の2つの手立てを提案し、小・中・高等学校で「話すこと [やり取り]」の授業実践を行った。教員が系統性を踏まえて対話表現の指導や発問を工夫した指導を行うことで、児童生徒の発話にどのような変容が見られるかを検証した。その結果、児童生徒は目的・場面・状況等に応じた内容や表現方法を考え、対話を継続・発展させて考えや気持ちを伝え合うようになることが明らかになった。

【キーワード】 話すこと [やり取り], 系統性, 対話の継続・発展, 発問, Small Talk

1 はじめに

小学校学習指導要領（平成29年告示）、中学校学習指導要領（平成29年告示）、高等学校学習指導要領（平成30年告示）では、互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から、「話すこと」の領域が、「やり取り」と「発表」に分けられた。

平成31年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、本県では、「（即興で）考えや気持ちなどを伝え合う」「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で問答したり意見を述べ合ったりする」といった「話すこと [やり取り]」の言語活動の実施状況が低い実態が見られる。また、聞いて把握した内容について、やり取りできるかどうかをみる問題では、正答率（参考値）が10.5%と全国的に低いことから、本県においても、情報や考えなどを即座にやり取りしたり、相手の発話の内容を踏まえて、それに関連した質問や意見を述べたりして、対話を継続することに課題があると言える。

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説では、「話すこと [やり取り]」の目標を踏まえ、生徒に身に付けさせたい力を3点示している（表1）。

表1 生徒に身に付けさせたい力

ア	「関心のある事柄」について即興で情報を交換したり、お互いの考えや気持ちを伝え合ったりすることができる力
イ	自分が伝えようとする事実や考え、気持ちなどのまとまった内容を伝えた上で、その内容に対する質問に回答するなどして相手とのやり取りを展開することができる力
ウ	聞いたり読んだりしたことを基にやり取りを展開していく力

表1は、小学校の目標を受けて設定され、全て高等学校の目標につながることから、小・中・高等学校の学びの連続性を意識した指導が重要である。しかし、本研究で行った小・中・高等学校教員への意識調査では、系統性を踏まえた授業づくりを行っているという回答した割合が42.5%と十分とは言えない。

これらの課題から、系統性を踏まえた「話すこと [やり取り]」の指導を充実させることが必要であると考えた。やり取りは双方向でのコミュニケーションであり、考えや気持ちを伝え合うためには、相手の発話に応じ、対話を継続・発展させることが不可欠である。さらに、児童生徒が考えを持ったり深めたりし、身に付けた英語表現等を実際のコミュニケーションで活用するための教員の働き掛けが必要である。

そこで、小・中・高等学校の系統性を踏まえた「話すこと [やり取り]」の指導における「対話表現集の活用」と「発問の工夫」の2つの手立てを提案する。

「対話表現集」は、小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（文部科学省、2017）を参考に、「一言感想」「確かめ」など、対話の継続・発展に必要な表現（以下、対話表現）を小・中・高等学校別の対話の具体例とともにまとめたものである。教員が「対話表現集」を活用して系統性を踏まえた指導を行うことにより、児童生徒が対話表現の使い方を理解してやり取りに生かし、対話を継続・発展させて伝え合うことができると考える。

発問の工夫とは、児童生徒が自分の考えを持ったり深めたりし、目的・場面・状況等に応じてやり取りすることにつなげるための教員の働き掛けである。本研究では、発問のねらいを表2のように捉えた。

表2 話すこと [やり取り] の指導における発問のねらい

・児童生徒の相手意識や目的意識を高める
・伝えたいことを何度も考えさせる
・多様な意見を踏まえて自分の考えを持たせる
・相手に伝わる内容構成を考えさせる
・コミュニケーションで使う英語表現等に気付かせ、活用を促す

教員が題材や言語材料等の既習事項を踏まえ、ねらいに沿った発問を行うことで、児童生徒が伝え合いたい内容や英語表現を自ら考え対話に生かすことができるようにする。そのことにより、目的・場面・

状況等に応じて考えや気持ちを伝え合う児童生徒が育成できるのではないかと考えた。

本研究では、「対話表現集の活用」と「発問の工夫」を手立てとした指導を小・中・高等学校で一貫して行うことにより、児童生徒の発話の変容を検証し、手立ての有効性を明らかにする。

2 開発研究

(1) 「対話表現集」

「対話表現集」は、教員が対話表現の指導を行うために、主に単元構想場面やSmall Talk^{*1}などの対話場面で活用することを想定して作成した。対話表現は、「対話の開始・終了」「繰り返し」「一言感想」「確かめ」「関連する質問」「相づち・つなぎ言葉」「自分のことを伝える」「意見を言う」「賛成・反対する」「流れを変える」の10項目である。

単元構想場面では、対話表現集に掲載した「教員用対話表現一覧表」や「対話の具体例」を参考に、最終の言語活動で児童生徒に活用させたい対話表現を選ぶことができる。小・中・高等学校別の具体例により、既習の対話表現の定着や新しい対話表現の習得に向けて、系統性を踏まえた指導ができるようにした。

Small Talkなどの対話場面では、「対話の具体例」を参考に、教員がデモンストレーションや児童生徒とのやり取りの中で、対話表現を指導することができる。本研究では授業実践において全ての校種でSmall Talkを設定した。「対話表現集」には、「Small Talkの進め方」を掲載し、教員同士（T-T）・教員と児童生徒（T-S）・児童生徒同士（S-S）といった対話の形態に応じたやり取りや教員の発問を例示した。また、児童生徒同士の対話後に中間指導を設定することにより、対話表現の指導を充実させることができるようにした。

さらに、教員が「対話表現集」を活用した指導のイメージを持つための「活用動画」、中・高等学校で生徒が対話表現を確認して対話に取り入れるための「生徒用対話表現一覧表」を作成した。

(2) 「発問づくりシート」

「発問づくりシート」は、単元を構想する際に、教員が発問を考える場面を想定して作成した。

本研究では、やり取りの指導における発問を大きく2つに分類した。1つ目は、「考えの形成を促す発問」である。この発問は、児童生徒に伝えたい内容を考えさせたり、題材について他者と意見を共有し、自分の考えを深めさせたりするために行う。2つ目は、「（目的・場面・状況に応じた）活用を促す発問」である。この発問は、児童生徒に内容構成、英語表現の工夫、コミュニケーションスキル（アイコンタクト、表情等）」について考えさせ、目的・場

面・状況等に応じて伝え合わせるために行う。分類した2つの発問を表3のように更に細かく分類し、児童生徒に考えさせたいことを明確にした。

表3 発問の分類

	発問の分類	児童生徒が考える内容
考えの形成を促す発問	a 言語材料の使用	言語材料を使ってやり取りするための自分の考え
	b 題材についての考え	単元の題材に対する自分の考え
	c 考えの共有と再考	他者の意見を受けての自分の考え
活用を促す発問	d 内容構成	目的・場面・状況に応じた伝え合う内容
	e 英語表現の工夫	相手に適切に応じたり、自分の考えや気持ちを伝えたりするための表現
	f コミュニケーションスキル	相手に伝わりやすい話し方や聞き方

「発問づくりシート」は、表3の分類を基にして作成したものであり、併せて、教員が発問を考える際の手引きとなる「作成手順」「活用動画」を作成した。教員が最終の言語活動に向けて、「作成手順」や「活用動画」を参考にしながら具体的な発問や発問を行う場面を考え、授業で問い掛けることで、児童生徒の思考を促し、目的・場面・状況等に応じたやり取りにつなげることができるように考える。

授業実践を行うに当たって「単元指導計画（例）」を作成した。対話表現の指導と発問の具体を位置付け、単元を通してやり取りの指導を充実させることに生かした。さらに、小・中・高等学校の系統性を踏まえた授業づくりを行うために、「題材・言語材料系統表」を作成した。教員が小学校から高等学校までの学習を一目で確認し、単元構想に役立てることができる。

3 実践研究

研究協力校5校で授業実践を行った。使用教材は、文部科学省発行のLet's Try!, 東京書籍発行のNEW HORIZON Elementary・NEW HORIZON English Course・All Aboard English Communication I である。実践した単元は表4のとおりである。

表4 研究協力校において実践した単元

A小学校	4年	Unit4 What time is it? Unit6 Alphabet
B小学校	6年	Unit3 Let's go to Italy Unit4 Summer Vacations in the World
C中学校	1年	Unit3 Club Activities Unit6 A Speech about My Brother
	2年	Unit3 My Future Job
D中学校	1年	Unit3 Club Activity
	2年	Unit5 Universal Design
	3年	Unit3 Animals on the Red List Unit5 A Legacy for Peace
E高等学校	1年	Lesson3 Cool Culture from Japan Lesson5 Finding My Future

(1) 対話表現集の活用

単元構想場面では、児童生徒の実態や単元の題材を踏まえて、指導する対話表現を選んだ。指導場面では Small Talkを設定し、① 対話の形態のステップ、② 教員の中間指導を取り入れて指導を行った。

① 対話の形態（T-T・T-S・S-S）のステップ

児童生徒同士で対話をさせる際には、以下のステップを踏んで指導した（表5）。

表5 対話の形態のステップ

ステップ1：教員の対話（T-T）
 ステップ2：教員と児童生徒の対話（T-S）
 ステップ3：児童生徒同士の対話（S-S）

「ステップ1：教員の対話（T-T）」では、教員のデモンストレーションの中で指導したい対話表現を児童生徒に繰り返し聞かせ、対話を継続・発展させながらやり取りをする姿を示した。「ステップ2：教員と児童生徒の対話（T-S）」では、教員が児童生徒とのやり取りの中で対話表現を使ってみせたり、児童生徒に練習させたりした。「ステップ3：児童生徒同士の対話（S-S）」では、児童生徒一人一人が対話表現を使いながらやり取りをする場を設けた。このようなステップを踏むことで、児童生徒が対話表現に慣れ親しみ、やり取りの中で使うようになった。

② 教員の中間指導

Small Talkでは、10～15分の活動の中に児童生徒同士の対話を2回設定し、1回目の対話の後に教員による中間指導を行った。対話表現を使って対話を継続・発展させているペアを紹介したり、デモンストレーションの再提示を行ったりし、どのように対話表現を使えばやり取りが継続するかを考えさせた。また、1回目の対話を見取り、必要に応じて児童生徒が使えなかった対話表現を指導した。その結果、2回目の対話では、どの校種でも対話表現を活用してやり取りを行う姿が多く見られるようになった。

以下は、C中学校のSmall Talkにおける抽出生徒の発話記録である（表6、7、8）。

表6 C中学校 発話記録 第1時 Small Talk（1回目）

C中学校 第2学年 Unit3 My Future Job 第1時 Small Talk（1回目）			
話題：What do you want to be?			
指導項目：「繰り返し」「一言感想」「質問」「自分のことを伝える」			
話者	ターン	発話内容	対話表現
S1	1	Hi○○○.	挨拶
S2	2	Hi○○○.	
S1	3	How are you today?	
S2	4	え、これってあの何？将来どうなりたいってことでしょ？	
S1	5	うん、そうだね、まあいいや。	
S1	6	What do you want to be?	
S2	7	なんて言う？	
S1	8	I want to be....	
S2	9	I want to be 看護師.	
S1	10	お～That's nice.	一言感想
S2	11	で、聞けばいい？	
S1	12	What do you want to be?	
S1	13	Umm, I want to be a good soccer player.	

表7 C中学校 発話記録 第1時 Small Talk（2回目）

第1時 Small Talk（2回目）			
話者	ターン	発話内容	対話表現
S1	1	Hi○○○.	挨拶
S2	2	Hi○○○.	
S1	3	What do you want to be?	
S2	4	I want to be...え、これもまた日本語で I want to be 看護師.	
S1	5	Oh, that's nice.	一言感想
S2	6	You want to be 看護師.	繰り返し
S2	7	What do you want to be ?	
S1	8	I want to be a good soccer player.	
S1	9	I like soccer so much. So, I want to be a soccer player.	自分のことを伝える
S2	10	Why do you want to be 看護師?	関連する質問
S2	11	Ummmm.	

S1	1	いいよ、日本語でいいよ。	
S2	8	私のお母さんもお姉ちゃんも看護師だから。	
S1	9	Oh, your family is 看護師.	繰り返し

1回目の対話後、中間指導で教員のデモンストレーションを再度聞かせ、生徒に自分の対話と違うところを考えさせた。S1は教員が使う「繰り返し」「自分のことを伝える」「関連する質問」の対話表現に気付き、2回目の対話で活用した。対話表現の表出回数は2回から6回、ターン数は7回から9回に増え、互いに将来の夢の理由を伝え合おうとしていた。

単元終了後のSmall Talkでは、対話表現の表出回数が8回、ターン数は11回に増えた。S1に促されながらS2も粘り強く対話に取り組み、S1とS2は互いに自分のことを詳しく伝えながら、対話を継続・発展させて考えや気持ちを伝え合うことができた。

表8 C中学校 発話記録 単元終了後の Small Talk

単元終了後 Small Talk			
話者	ターン	発話内容	対話表現
S1	1	Hi, how are you?	挨拶
S2	2	I'm happy.	
S1	3	Why are you happy?	関連する質問
S2	4	え？日本語でいい？	
S1	5	うん、日本語でいいよ。	
S2	6	今日部活があるから幸せです。	
S1	7	Oh, that's nice.	一言感想
S1	8	Ah, I have a question for you...for you じゃないや to you.	
S1	9	What do you want to be in the future?	
S2	10	I want to be nurse.	
S1	11	Oh, why do you want to be nurse?	関連する質問
S2	12		
S1	13	日本語でもなんでもいいよ。	
S2	14	My mother and sister...nurse.	
S1	15	I want to work with my sister.	自分のことを伝える
S1	16	Oh, that's nice.	一言感想
S2	17	What...	
S1	18	How about you ? でいいよ。	
S2	19	How about you ?	
S1	20	Ah, I want to be a good soccer player.	
S1	21	Because I like to play soccer. And when I play soccer, I am fun.楽しい。	自分のことを伝える
S1	22	Bye-bye.	挨拶

他の研究協力校においても抽出した児童生徒の発話記録を検証した。その結果、対話表現の表出回数とターン数が増加し、相手の発話に対する「確かめ」や「一言感想」等を伝え合う様子が見られた。一方で、中・高等学校では、言語材料が増えて英語表現も多様になることから、中間指導で教員が全ての対話を見取って助言することは難しく、生徒が対話表現の活用に関心する場面も見られた。そこで、生徒自らが対話表現を確認し、対話に取り入れるために、生徒用対話表現一覧表が必要であると考え、作成した。

(2) 発問の工夫

教員が指示や説明だけでなく発問を行うことで、児童生徒が対話の内容や英語表現について考え、自らの力でやり取りを展開することを目指した。授業実践における発問の工夫は以下の通りである。

① 発問づくりシートの活用

単元構想場面では、単元目標や最終の言語活動を設定し、指導する言語材料や既習事項、対話表現に

ついて検討した。その際、最終の言語活動における児童生徒のやり取りを複数例考えることで、様々な対話の展開を想定し、発問づくりに生かした。発問づくりでは、本研究で考案した2つの発問の分類(表3参照)を参考に、児童生徒に考えさせたいことや気付かせたい表現などを明確にした。「考えの形成を促す発問」では、自分の経験や日常生活、教科書等の題材、友達の意見について考えさせ、児童生徒の伝えたい思いが膨らむようにした。また、「(目的・場面・状況に応じた)活用を促す発問」では、児童生徒が身に付けた英語を駆使して内容構成や英語表現を考えたり、ジェスチャーや表情などのコミュニケーションスキルの活用場面を考えたりすることで、相手意識を高めて伝え合うことができるようにした。

表9は、B小学校Unit4における発問の内容である。単元の最後に、自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、夏休みの思い出について伝え合うやり取りを設定した。

表9 B小学校 発問の内容〔 〕は児童から引き出した内容)

B小学校 第6学年 Unit4 Summer Vacations in the World	
「考えの形成を促す発問」	
a 言語材料の使用	①Where did you go? [I went to～.] ②What did you enjoy? [I enjoyed～.] ③What did you eat? [I ate～.] ④How was it? [It was～.] ⑤How was your summer vacation? [I went to/enjoyed/ate～., It was～.]
「(目的・場面・状況に応じた)活用を促す発問」	
d 内容構成	⑥どのような思い出を伝えたいですか。(第1時・第5時) [行った場所, したこと, 食べた物] ⑦したことや食べた物について詳しく伝えるために, 何を付け足しますか。(第3時) [様子や味]
e 英語表現の工夫	⑧「誰と」「どこで」などを聞き出すために, どのような表現を使いますか。(第4時) [When?, Where?, Who with?, How was it?] ⑨詳しく伝えるために, 付け足すとよい表現は何ですか。(第5時) [in(場所), with(誰)] ⑩相手を引き付けるために, どのような表現を使って質問しますか。(第5時) [Do you like～?]
f コミュニケーションスキル	⑪(モデル動画の後) 相手に伝わりやすくするためのよさは何ですか。(第6時) [アイコンタクト, クリアボイス, スマイル, ジェスチャー, 強調して話す]

② 発問を行う場面での工夫

発問を行う場面では、指導形態の工夫として、手立て1で述べた「対話の形態のステップ」(表5参照)の2と3を踏んで指導した。教員の発問によってT-Sの対話を生み、更にS-Sの対話を設定することで、児童生徒が考えた内容や英語表現を実際のコミュニケーションにおいて伝え合う機会を作った。教員が発問をした際に、気付かせたい英語表現が児童生徒に定着していない場合は、過去に行った言語活動やChant, 歌などを想起させた。また、中・高等学校では、英語での発問を生徒が理解できるよう、実態に応じてペアで発問の内容を確認する活動を設定した。

表10は、B小学校における抽出児童の発話記録である。表9の発問によって児童が考え、やり取りに生かした様子が表れている。

表10 B小学校 抽出児童の発話記録と発問との関連

話者	発話内容	発問
S1	Hello.	
S2	Hello.	
S1	How was your summer vacation?	⑤
S2	I went to the stadium.	①⑥
S1	Where?	⑧
S2	(地名)stadium. I enjoyed playing baseball. I ate corn potage gummy.	2③⑥
	It was not delicious.	⑦
	How was your summer vacation?	⑤
S1	I went to the sea.	①⑥
S2	Where?	⑧
S1	In (地名).	⑨
S2	Oh, who with?	⑧
S1	My family.	
S2	Oh. (うなずく)	
S1	I enjoyed swimming. I ate shaved ice. It was fun.	2③④⑥
S2	Thank you.	

S1とS2は、夏休みについて特に伝えたいことを明確にし、詳しく伝えるための内容や英語表現を考えながらやり取りすることができた。夏休みの出来事に加えて、「It was not delicious.」という食べた物の味や、「It was fun.」という気持ちを伝え合っていた。また、相手の発話を受けて「Where?」や「Who with?」と更に質問し、詳しく聞き出す姿が見られた。

他の抽出児童も発問によって考えた内容や英語表現等を対話に生かし、やり取りすることができた。

中・高等学校では、社会的な題材を共通の話題としてやり取りをする際、「考えの形成を促す発問」として、先に述べた「a 言語材料の使用」の発問に加えて、「b 題材についての考え」「c 考えの共有と再考」の発問を行った。表11は、D中学校Unit5で行った発問から、「考えの形成を促す発問」b及びcの内容を抜粋したものである。単元の最後にはパフォーマンステストを設定し、教員と生徒の対話(T-S)の形態でやり取りを行った。生徒が平和や人権の大切さについて考えるために、教員はガンディーの生涯や功績について自分だったらどう思うかなどの質問をして生徒自身の考えを引き出した。

表11 D中学校 発問の内容(抜粋)

D中学校 第3学年 Unit5 A Legacy for Peace	
「考えの形成を促す発問」	
b 題材についての考え	①What do you think about discrimination in South Africa? ②What do you think about Gandhi's message? ③What do you think about the Salt March? ④What do you think about non-violence? ⑤What do you think about Gandhi?
c 考えの共有と再考	⑥What is your idea?-What do you think? ⑦Do you have the same idea or a different idea? -What is your idea?

「b 題材についての考え」①～⑤の発問では、教科書の教材文にある南アフリカの差別や、ガンディーが非暴力を訴えた「塩の行進」などについて、生徒に自分の考えを持たせた。教員が発問を通して生徒とやり取りをし、更に生徒同士の対話につなげることで、自分の考えを伝え合う活動を繰り返し行った。その後、「c 考えの共有と再考」⑥、⑦の発問を通して、全体で考えを共有した。教員がファシリテートし、複数の生徒から考えを引き出した。

表12は、パフォーマンステストにおける抽出生徒の発話記録である。

表12 D中学校 抽出生徒の発話記録と発問との関連

話者	発話内容	発問
T	What do you know about Gandhi?	
S1	He was a lawyer.	
T	What kind of person is Gandhi?	
S1	He was very kind, because he used non-violence.	①⑤
T	What do you think about non-violence?	
S1	I think it's a great idea, because hurting other people is bad thing.	④
T	Good.	
	So, why is Gandhi respected by many people?	
S1	Because he stood against the law and he led Indians to independence.	①③
T	OK. Good.	
	Do you have any questions?	
S1	What do you think about Gandhi?	
T	He is a good person, because he saved many Indians.	
S1	Yes.	
T	OK. Good.	

S1の生徒は、ガンディーの功績について理由を明確にして自分の考えを述べる事ができた。単元の初めに行った「b 題材についての考え」の発問では、「差別についてどう思いますか」に対して、多くの生徒が自らの経験や知識を踏まえて直感的に「悪い」「悲しい」などと答えていた。しかし、発問を通したやり取りを繰り返し行うことで、教材に示された内容や他者の考えなどを踏まえ、深く考える姿が見られた。その結果、S1のように自分の考えを具体的に話すことができた生徒は半数程度に増えた。

(3) 児童生徒の意識調査の結果

研究協力校5校において児童生徒の意識調査を行った。「先生や友達に英語で尋ねたり答えたりして、自分のことを伝えようとしたか」「先生や友達に英語で尋ねたり答えたりして、相手のことを知ろうとしたか」という質問において、5校全てで肯定的な回答が増えた。この結果から、児童生徒は自分のことを伝えようとしたり、相手のことを知ろうとしたりし、相手意識を高めてやり取りに主体的に取り組むことができたと考えられる（図1）。

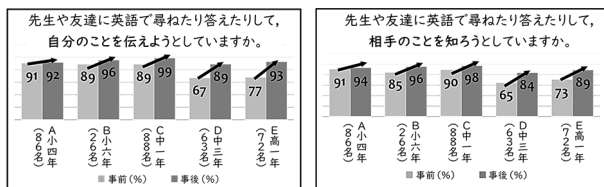


図1 意識調査の結果

4 おわりに

(1) 成果

① 対話表現集の活用

対話表現集を活用して指導に生かすことは、児童生徒が対話を継続・発展させて考えや気持ちを伝え合うことに有効であった。教員が対話の具体例から指導のイメージを持ち、T-TやT-Sのやり取りの中で対話表現を活用することで、児童生徒が使い方を理

解し、友達とのやり取りに生かすことができた。また、最終の言語活動においても対話表現の表出が見られたことから、Small Talk等での指導の積み重ねによって、児童生徒がその場に応じた対話表現を自ら活用できるようになるということが分かった。

② 発問の工夫

教員が発問を工夫することは、児童生徒が伝え合いたい内容や適切な表現を自ら考え、目的・場面・状況等に応じて考えや気持ちを伝え合うことに有効であった。中学校では、生徒が題材について考えを持ち、他者とその考えを共有するために行う発問により、題材に対する深い考えを持つことができた。発問によって児童生徒の思考を促すことで、型にはまったやり取りにとどまることなく、児童生徒自らの力で考えや気持ちを伝え合うことができるようになることが分かった。

(2) 今後の課題と展望

研修員が年間を通して授業実践を行い、2つの手立ての有効性をより明らかにすることが必要である。

「対話表現集の活用」では、中・高等学校において生徒用対話表現一覧表を活用した指導を行うことで、生徒の対話にどのような変容が見られるかを検証したい。また、対話表現は指導してすぐに身に付くものではないことから、年間を通した継続的な指導を行い、手立ての有効性を再検討していきたい。

「発問の工夫」では、2つの発問の分類（表3）による発問づくりの有効性を見いだすことができた。「発問づくりシート」を活用し、発問を行う場面や具体の発問を更に吟味していく。

「対話表現集」や「発問づくりシート」を外国語科の指導に関わる教員に広く活用してもらえるように普及を図りたい。

【注釈】

- *1 Small Talkとは、2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」より

【引用・参考文献】

- 文部科学省 国立教育政策研究所：「平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 報告書【中学校／英語】」，2019
- 文部科学省：「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編」，2018
- 文部科学省：「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」，2017

【図表等の許諾について】

表6，7，8，10，12は、実践授業における児童生徒の発話記録である。研究の目的にのみ使用することで、研究協力校から使用許諾を得た。

英語で自分の考えや気持ちを伝え合う児童生徒を育てる授業づくり

～小・中・高等学校の系統性を踏まえた「話すこと[やり取り]」の指導の充実を通して～

背景 ○学習指導要領の改訂 「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」の五つの領域が設定され、「互いに考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動」が一層重視されている。	実態 ○平成31年度全国学力・学習状況調査 やり取りに関する問題の正答率が10.5%（参考値）と全国的に低い。また、宮城県で「話すこと[やり取り]」の言語活動を実施している学校の割合が低く、全国とのかい離も大きい。	○専門研究における小・中・高等学校教員の意識調査（令和3年度） 「系統性を踏まえた授業づくりを行っている」と回答した割合が42.5%と、十分とは言えない。
--	--	--

研究目標 英語で自分の考えや気持ちを伝え合う児童生徒を育てる授業づくりを行うために、小・中・高等学校の系統性を踏まえた「話すこと[やり取り]」の指導方法を提案し、授業実践を通してその有効性を明らかにする。



実践研究

1 対話表現集の活用

○「一言感想」「確かめ」など、対話の継続・発展に必要な表現の指導

単元構想場面：指導する対話表現を選択する。
Small Talkなどの対話場面：教員のデモンストレーションや児童生徒とのやり取りの中で指導する。

対話表現集

教員用対話表現一覧表		
項目	内容	例
1 対話の開始・終了	・対話の始めと終わりの挨拶をする。	Hello. / How are you? /
2 繰り返し	・相手の話した内容の中心となる語や文を繰り返して、理解していることを伝える。 ・相手が1回で聞き取ることができていないなど、かつたら、もう一度繰り返し内容を伝える。 ・店員とお客のやり取りで、注文を繰り返して確かめる。	
3 一言感想	・相手の話した内容に対して自分の感想を簡単に述べ、内容を理解していることを伝える。	(The That That That
4 確かめ		
5 関連する質問		
6 相づち・つなぎ言葉		
7 自分のことを伝える		
8 意見を言う		
9 賛成・反対する		

教員は、「教員用対話表現一覧表」や「対話の具体例」を活用し、授業づくりを行う。

生徒は、「生徒用対話表現一覧表」を見て、対話表現を確認し、対話に取り入れる。

生徒用対話表現一覧表

項目	英語	日本語
1 対話の開始・終了	Hello. How are you? Excuse me. What's wrong? Look. Thank you. See you. Nice talking to you. I enjoyed talking with you.	こんにちは。 調子はどう？ すみません。 どうしたの？ 見て。 ありがとう。 またね。 話せてよかったです。 話せて楽しかったです。
2 繰り返し	That's (nice. / great. / Sounds (great. / good to me.) Good job. / Well done. Wonderful. / Awesome. / Perfect. / Fantastic. / Super. / Cool. I was very (impressed. / inspired.) That's interesting. Good luck. / Do your best.	いいね。 よくできました。 素晴らしい。 素晴らしい。 感動しました。 面白いね。 頑張ってください。
3 一言感想（共感する・驚く・心配する）		

2 発問の工夫

○自分の考えや気持ちを目的・場面・状況等に応じて伝え合うための指導

単元構想場面：発問の分類（a～f）を参考に発問をつくる。
発問を行う場面：発問によって児童生徒の思考を促し、実際のコミュニケーションでの英語表現の活用につなげる。

発問の分類

発問	分類	目的
考えの形成を促す発問	a 言語材料の使用	言語材料を用いて問い掛けたり、答えさせたりする。
	b 題材についての考え	題材について考えを持たせる。
	c 考えの共有と再考	題材についての考えを共有して、さらに自分の考えを深めさせる。
目的・場面・状況に応じた活用を促す発問	d 内容構成	目的・場面・状況に応じた伝え合う内容を考えさせる。
	e 英語表現の工夫	相手に適切に応じたり、自分の考えや気持ちを伝えたりするための表現を考えさせる。
	f コミュニケーションスキル	アイコンタクトやジェスチャーなど、相手に伝わりやすい話し方や聞き方を考えさせる。

実践授業

I 期

A小学校（6年）、B小学校（4年）
C中学校（1年・2年）、D中学校（3年）
E高等学校（1年）

II 期

A小学校（6年）、B小学校（4年）
C中学校（1年）、D中学校（2年・3年）
E高等学校（1年）

開発研究

○対話表現集（教員用対話表現一覧表・対話の具体例・生徒用対話表現一覧表・Small Talkの進め方・活用動画）
○発問づくりシート（具体例・作成手順・活用動画）
○題材・言語材料系統表
○単元指導計画（例）

検証

【手立て1】 生徒の発話記録から
中学校2学年【話題：What do you want to be?】

	第1時1回目 Small Talk	第1時2回目 Small Talk	単元終了後 Small Talk
対話表現の使用	2回	6回	8回
ターン数	7回	9回	11回

理由を尋ねたり、相手の発話を繰り返したりしていた。

対話を継続・発展させる力が向上した。

【手立て2】 児童の発話記録から
小学校6学年【夏休みの思い出について伝え合う活動】

A: How was your summer vacation? B: I went to the sea.
A: Where? B: In (地名).
A: Oh, who with? B: My family.
A: Oh. (うなずく) B: I enjoyed swimming.
I ate shaved ice. It was fun.

詳しく伝えるための内容や英語表現を考えてやり取りしていた。

目的・場面・状況等に応じてやり取りする姿が見られた。

めざす児童生徒像

英語で自分の考えや気持ちを伝え合う児童生徒